



「お子様に関する特別調査」の概要



慶應義塾大学 パネルデータ設計・解析センター

☆この調査には、ご家庭でお答えいただく、親御様へのアンケートとお子様へのアンケート・テストが含まれます。



親御様へのアンケート：お子様の子育てや生活についてのご質問です。
お子様1人につき6ページ、所要時間は約10分です。



お子様へのアンケートとテスト：お子様の学習や生活についてのご質問と、算数/数学
国語等のテスト問題が含まれます。所要時間は約20～30分です。



* 調査の実施にあたっては、情報の管理を徹底いたします。特にお子様の調査票はシールで封印していただいた上で回収いたします。また、個人情報は調査会社のみで管理し、ご回答を分析する研究者は、個人が特定できないようにいたします。

* お子様のテスト結果にご関心のある方は、インターネットを通して、テスト結果の概略（お子様の各教科の正答数と偏差値）をご覧いただけます（2013年夏以降、専用パスワードにて閲覧予定）。

* 調査にご協力いただきました方（ご回答いただきました親御様とお子様全員）に、**薄謝（お一人当たり図書カード500円相当）**を用意いたしております。

さらに、ご協力いただきますお子様全員に**慶應マーク入り特製クリアフォルダー**を進呈いたします。どうかできる限りのご協力をお願い申し上げます。



これまでの「お子様に関する特別調査」の結果より、いくつかのトピックをご紹介します。

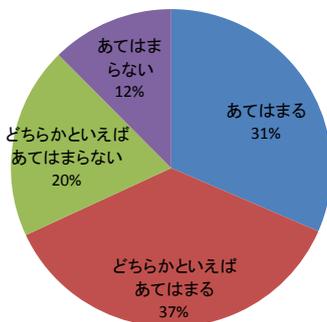
1. 投票意識は子どもの頃から？

中学生の投票意識

11月16日、衆議院が解散し、12月16日には衆議院議員選挙が行われます。このニュースレターが皆様のお手元に届くころには、これからの日本の国政を担う新しいメンバーが選出されていることでしょう。しかし、今回も懸念されるのが投票率の低さです。過去2回の衆議院選挙の投票率は、2005年が68%、2009年は69%でした。この値は、たとえば実質18歳以上の国民全員が投票する、オーストラリアの100%に近い投票率と比べれば、随分低い値となっています。

こうした選挙に対する投票の意識は、子どもの頃から形成されているのでしょうか。「お子様に関する特別調査」では、中学生476名に、「成人したら、選挙のたびに、欠かさず投票に行こうと思う」という態度に対し、自分がどの程度当てはまるのか、回答してもらいました。

Q. 成人したら、選挙のたびに、欠かさず投票に行こうと思う



「あてはまる」か「どちらかといえばあてはまる」を選んだ割合は68%であり、つまり成人後きちんと毎回選挙に参加しようと思っている中学生は、全体の68%であることがわかりました。この値は近年の衆議院選挙の投票率とも一致しています。もちろん、中学生の頃の投票への意識が、成人後まで持続していくのかどうかはこの結果からはわかりませんが、選挙に対する冷めた気持ちは、早くも中学生の頃から芽生えているといつてよいでしょう。

では、こうした中学生個人の意識の違いは、どこから来ているのでしょうか。「政治や社会問題について知ることは、自分にとって重要か」という問いに、「重要である」と答えた中学生と、「重要でない」と答えた中学生に分けて、先の投票への意識の回答をもう一度分析してみました。

「重要である」と答えた中学生の中では、86%が欠かさず投票に行こうと思っているのに対し、「重要でない」と答えた中学生のうち、欠かさず投票に行こうと思っている方は、36%しかいませんでした。これより、中学生にとっての成人後の投票に対する意識には、その個人の政治や社会に対する関心の高さが関連しているということがわかります。

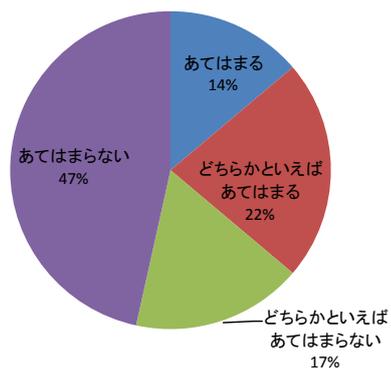
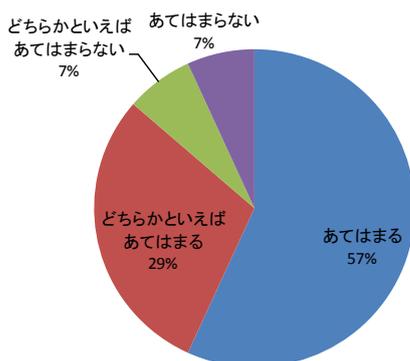
今後も継続して調査にご協力いただくことにより、どのようなライフイベントが政治や社会に対する関心を高め、ひいては投票に対する意識に影響を及ぼすのか、明らかにしていく必要があります。

政治や社会問題について知ることは・・・

「重要である」と答えた中学生

「重要でない」と答えた中学生

Q. 成人したら、選挙のたびに、欠かさず投票に行こうと思う



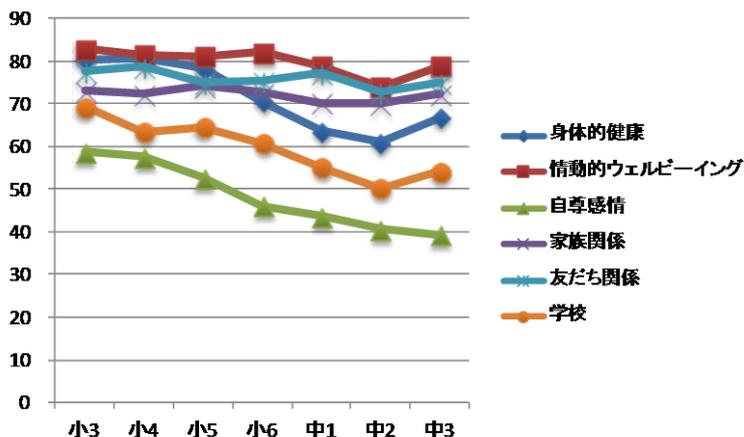
2. 学年が上がると、生活の質が下がる？

子どもの QOL の学年変化

QOLとは Quality of Life の略であり、「生活の質」を意味します。「お子様に関する特別調査」では、小中学生の子ども自身が感じる QOL を様々な項目からおたずねし、子どもが日常生活の中で感じる適応感（満足感や充足感）の程度を、身体的健康、情動的ウェルビーイング、自尊感情、家族的ウェルビーイング、自尊感情、家族関係、友だち関係、学校という6つの次元別に、測定させていただいています。

これら6次元の得点をそれぞれ100点満点に換算して、小学3年生から中学3年生まで、学年別に平均点を求めてグラフに示しました。

子どもの適応感6次元の得点の学年別変化

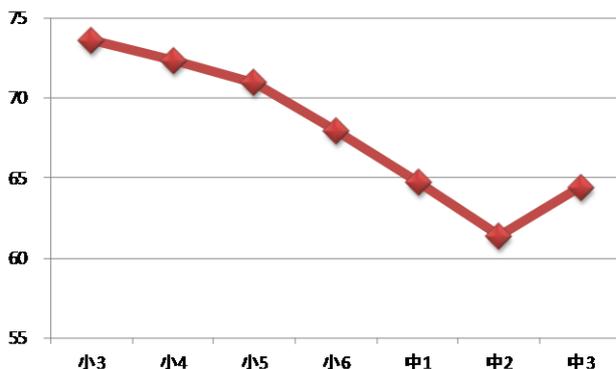


どの次元も、学年が高くなるにつれ、得点が低くなる傾向が見てとれます。とくに学校でどの程度うまくやっていると感じているか、そして自分自身についてどのぐらいポジティブな気持ちになれるかという「自尊感情」において、その傾向は顕著です。

子どもたちが日常生活において、成長とともに、満たされているという気持ちを低めていくような原因とは一体何なのか、さらに分析を進めていく必要があります。

子ども個人の6次元の得点を合計することにより、全般的な QOL 得点を求め、その学年別の平均得点もグラフに示してみました。

子どもの QOL 得点の学年別変化



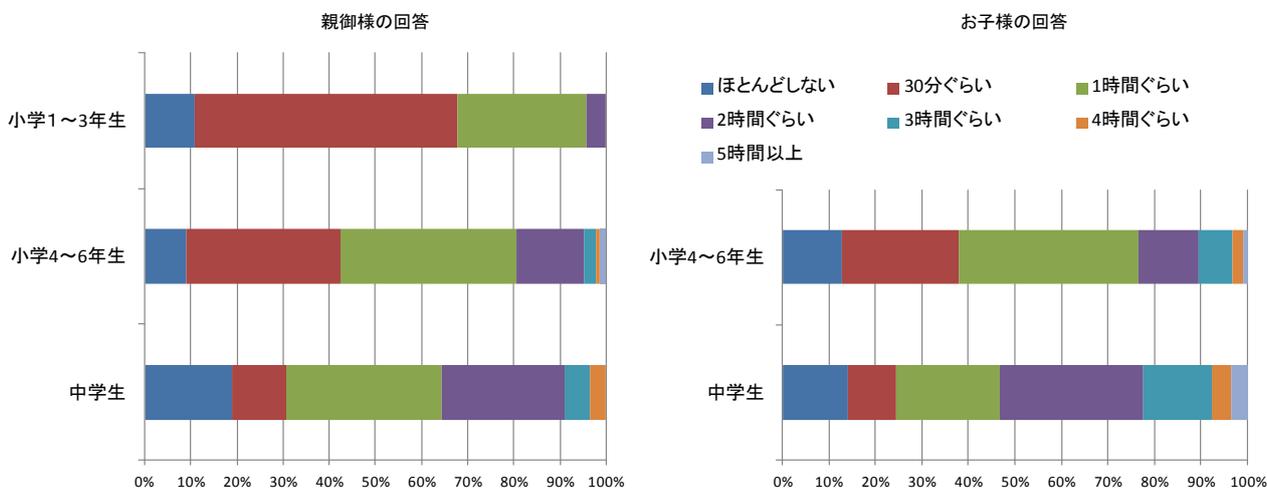
やはり、小学3年生から中学2年生まで、徐々に得点が下がっていきませんが、中学3年生でまた少し戻ることがわかります。今回調査にご協力をいただいた時期は、ほとんどの方が3月です。中学3年生にとっては、進路が決まったことで、充足感がそれまでより高くなっている可能性もあります。

この回復が一時的なものなのか、高校生になって新しい生活が始まりどのように推移していくのか、興味深いです。子どもたちの安寧を願って、分析を続けてまいります。

3. 学年が上がるほど、子どもによって勉強時間に差

子どもの勉強時間

Q. ふだんの日に学校から帰ってどのぐらい勉強しますか



ふだんの日の子どもの学校以外での勉強時間（塾や家庭教師などの勉強時間も含まれます）について、お尋ねしました。左側のグラフが親御様からの回答、右側のグラフがお子様ご本人からの回答で、それぞれ小学校低学年と、小学校高学年、中学生別に集計してみました。小学校低学年の場合、お子様にはお尋ねしていません。

小学1年生から3年生では、ほとんどの子どもの勉強時間が30分程度であるのに対し、小学4年生から6年生になると、1時間ぐらいのケースが増えていることがわかります。

そして、中学生になると、2時間以上も増えますが、ほとんど勉強しない子どもも増えていることが見てとれます。つまり、学年が上がるほど、子どもによって勉強時間に差がはっきりと現れてくるのが理解できます。

また、お子様ご自身の回答の方が、親御様の回答より、勉強時間が少し長めであることも興味深いです。この傾向はとくに中学生に見られ、中学生にもなると、案外親が思っている以上に、子どもは勉強しているのかもしれない。



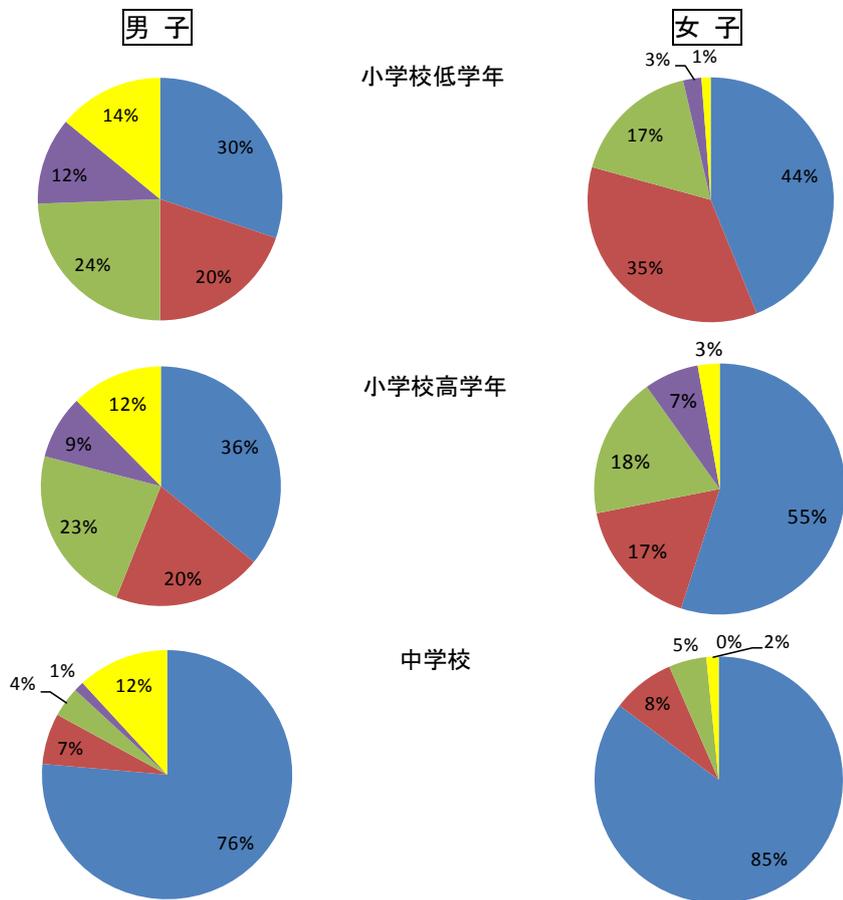
4. 運動系の習い事は、小学校低学年で高く、その後減少

運動系の習い事

サッカーや野球など、運動系の習い事をしている子どもの割合は、小学校低学年男子では70%、女子では56%となっていました。小学校高学年になると、その割合は少し減少し、男子で64%、女子では45%となっています。このように運動系の習い事の頻度は高学年の方が少ない傾向がありました。これは、学年が上がると、運動から学習へと習い事に求めるものの変化するためと考えられます。

また、中学校では、運動系の習い事の頻度は非常に少なく、男子で24%、女子で15%となっていました。中学校で運動系の習い事の頻度が少ないのは、学校での部活の影響が大きいと思われる。つまり、中学校では部活が運動系の習い事の代わりとして機能しているものと思われる。

Q. スポーツの習い事を、学校外で週何日ぐらい利用していますか



5. 中学生は男女とも約半数が塾や家庭教師を利用

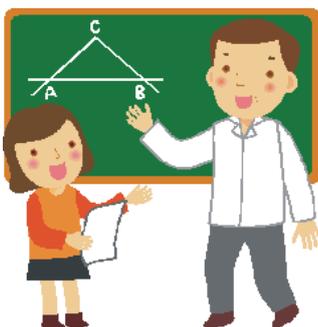
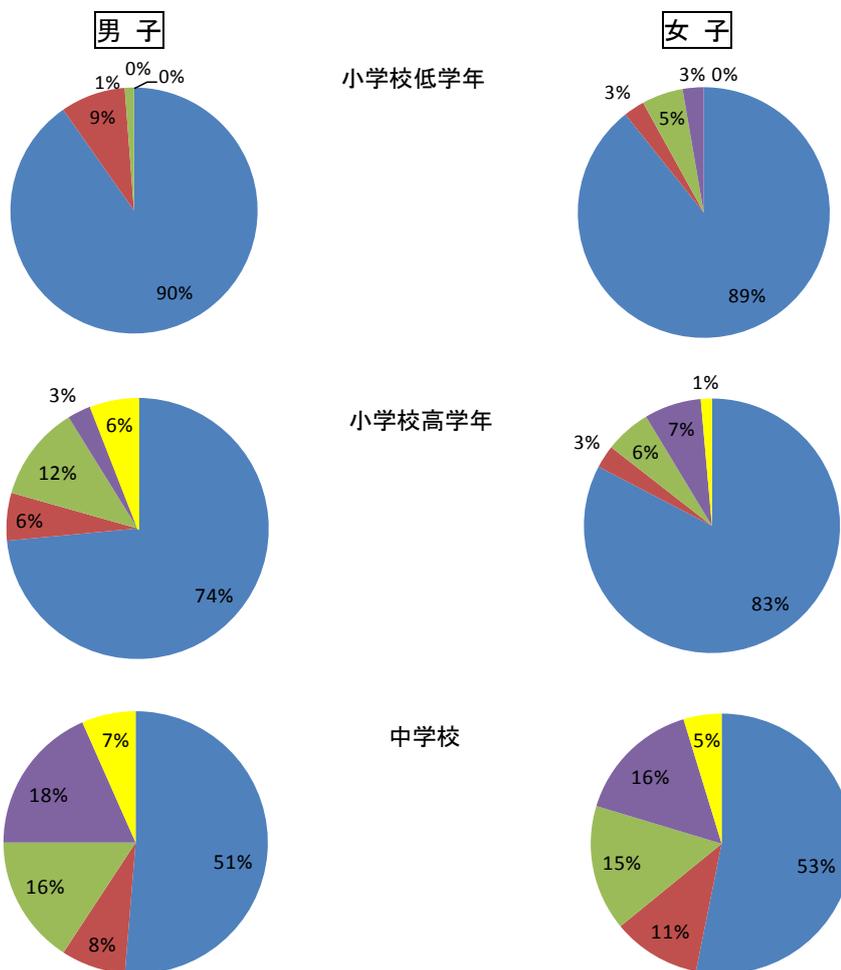
塾や家庭教師の頻度

塾や家庭教師の習い事の頻度を見てみましょう。塾や家庭教師は、小学校低学年では女子の方が多く通っている傾向が見てとれます。ただし、小学校高学年では男女に差は見られておりません。小学校低学年の段階では男子の習い事は運動系にかたよっており、まだ学習は重視されていない傾向にあるのではないかと考えられます。

一方、中学校では、男女とも約半数の子どもが塾や家庭教師に通っていました。中学校に入ると高校受験が視野に入ってくるため、習い事として学習が重視されるようになり、塾や家庭教師に通うようになることがうかがえます。

Q. 塾・家庭教師を、週何日ぐらい利用していますか

■ 習っていない ■ 週に1回 ■ 週に2回 ■ 週に3回 ■ 週4回以上



6. 小1と小6のお小遣いの額の差は約1000円, 中1と中3の額の差は約1500円

毎月のお小遣いについて

学年ごと、性別に、毎月のお小遣いの金額を集計したところ、どの学年においても男子と女子の間に顕著な差は見られませんでした。小学1年生では平均して約500円のお小遣いは、学年が上がるにつれ上昇傾向にあります。

また、小学1年生と小学6年生の金額の差が約1000円なのに対し、中学1年生と中学3年生の金額の差が約1500円となっており、小学校に比べて、中学校の1学年の金額の差が大きくなっていることが見てとれます。小学校の時と異なり、中学校に入ると毎年のお小遣いのアップ率が大きくなるという家庭は多いのではないのでしょうか。

